

研究支援事業の評価について

2010年11月2日

東洋大学

山田 肇

研究支援事業の事前評価

- 10年10月にある事業の事前評価を担当した
- 29提案のうち、山田の評価はAが2件、Bが2件、Cが5件で、20件はD以下（事業趣旨に合致していない）であった
- AとBについては他の評価委員とほぼ一致した
- Cの中には、他の評価委員と意見が分かれたものがあった
- Dは他の評価委員も低評価が多いが、一部に意見が分かれたものがあった

研究支援事業の事後評価

- 10年6月と7月にある事業の事後評価を担当した
- 実施済みの35件のプロジェクトのうち、山田の評価はAが7件、Bが20件、Cが7件で、1件はDであった
- 他の評価委員の評価の詳細は不明だが、D評価の1件については「完全な失敗」で一致した

失敗の容認が必要

- 有識者といえども、評価委員の評価結果は必ずしも一致しない
- 評価の高い提案を実施したはずだが、確率的に失敗が発生している
- この失敗を取り上げて予算の無駄遣いと批判するのは間違いで、失敗は研究の宿命
- むしろ、研究ゆえハイリスクハイリターン型を奨励してもよいかもしれない
 - (例)他の評価委員の評価は低くても、一部の委員が強く押せば実施させる

低い事後評価に一定の傾向

- 低い事後評価には一定の傾向があり、それを蓄積すれば次の事業に活用できる
 - (例) 中小企業・新しい研究者のプロジェクトは事後評価が高く、大企業・著名研究者のプロジェクトは低い傾向
 - 大企業・著名研究者にとって政府の支援は「リスクフリー」の支援だが、中小企業・新しい研究者には千載一遇のチャンス

垂直統合型の提案・プロジェクトは低評価

- サービスとネットワーク一体で進める垂直統合型の提案・プロジェクトには低評価が多い
 - (例) 国際空港でエリアワンセグによって外国人観光客に情報を伝える
 - 外国人はワンセグを受信できる携帯電話を持っていないのでダメなプロジェクト
 - ネットワークは問わず、空港での情報提供サービスとして研究すればよい

海外展開を展望する

- 日本発で押すだけでは海外展開できない。海外発の標準化にもきちんと対応しつつ、日本の技術を入れる戦略性が必要
 - (例)さまざまな電子書籍フォーマットに効率よく変換できる中間フォーマットを開発するなら、海外でデファクトのEPUBもサポートする
 - (例)EPUBを拡張して日本語仕様を取り入れるように働きかける
- 特にインターネット系(IETF、W3C、IEEEなど)では海外との関係を意識する必要がある

評価委員の意見を提案者・プロジェクト推進者にフィードバックする

- 垂直統合的発想、海外展開意欲の欠如などに対して、評価委員の意見をフィードバックすれば、成功確率が高まる可能性がある
- 今回の事前評価では「提案Aと提案Bが協力すれば、もっとよいプロジェクトになる」という意見が、評価委員からいくつか出たが、このような意見も反映できる道筋を作る

評価委員による評価は公表する

- 事前評価についても事後評価についても、すべての評価は評価委員ごとに公表する
- 公表によって次のような効果が期待できる
 - 成功する提案を見抜く力のある評価委員がわかる
 - 成功する提案をする組織・研究者が分かる

まとめ

- 研究に失敗はつきもので失敗プロジェクトを支援したことは税金の無駄遣いではないが、個別の評価を公開することで、成功プロジェクトが選ばれる可能性が高まり、税金はより有効に活用されるようになる
- 評価を集積し分析することで、たとえば中小企業・新しい研究者を大企業・著名研究者よりも積極的に支援する、ハイリスクハイリターン型への挑戦を奨励するといった新しい施策が生まれる可能性がある